

日本語における女性の話しことばに関する意識

本田 明子

キーワード：女性の話しことば、意識調査、実例分析、男女差、男女度

はじめに

日本語の男女の話しことばにはどのような違いがあるだろうか。筆者は電話による実際の会話を資料としてどのような男女差がみられるかという分析をおこなった(本田 1992)。その結果、女性の話しことばにはいくつかの特徴がみられた。この実例にみられた特徴は女性の話しことばの特徴として意識されているだろうか、また、日本語の男女差についてはどのような意識が持たれているであろうか。これらの点について、アンケートによる意識調査をおこなうことにした。

1. 調査の方法

調査は実例分析に基づき作成した調査用紙によるアンケート法でおこなった。

1.1 調査対象

主に東京近郊在住の社会人および学生を調査の対象とした。学生は筑波大学に在学する生物・農林専攻の男女25名、体育専攻の男女30名、比較文化専攻の男性1名、大学院生男女7名の計63名(男性37名、女性26名)で、直接渡し、その場で回収した。社会人は107名に郵送により配布し、20代から70代までの男性34名、女性41名の計75名から回答を得た(回収率76.6%)。社会人・学生をあわせて回答者は138名となった。

回答者の性別は男性71名(51.4%)、女性67名(48.6%)と、男性女性ほぼ同数となった。

1.2 調査時期

調査は1992年10月から11月にかけておこなった。

1.3 調査用紙の項目とねらい

これまでの研究により女性は男性よりも丁寧度の高い表現をもちいること(Brown 1980、井出他 1985)、また、変異形より標準形を好むこと(Trudgill 1972)が指摘されている。しかし、筆者がおこなった実例分析の結果には、これらの指摘と直接には結びつかない女性の話しことばの特徴がいくつか見られた。たとえば、「チャウ」などの縮約形は女性のほうが多くもちいるようであるが、これは女性が男性より標準形を好むという指摘に反している。そこで、意識調査では、実例にみられた女性の話しことばの特徴について実際の使用のさいに

①女性の話しことばに多い特徴として意識されているかどうか

②聞き手にどのような印象を与えるか

という二点を調べることにした。さらに、日本語の男女の違いについてどう思うかという一般的な質問をおこなった。

実例分析の主な結果は次のとおり。

a. 一発話の長さ

- ・女性の発話は男性より長い。

b 助詞

- ・女性は男性に比べて発話の最後に接続助詞を伴うことが多い。
- ・女性は「ね」、男性は単独の「よ」を多くもちいる。

c 発話の終末部の形

- ・女性は連用形終止が多く、男性は名詞で終わる発話（体言止め）が多い。

d チャウなどの縮約形

- ・縮約形は女性のほうが多くもちいる。

e トカ、ミタイ、イチオなどの断定を避ける表現

- ・女性は「とか」「なんか」などの断定を避ける表現を多くもちいる。

f その他の特徴(発話の種類)

- ・倒置は男女ほとんど差はない。
- ・省略は女性のほうが多い。
- ・疑問発話は男性のほうに多い。

この実例分析の結果と、前述のような先行研究の指摘をもとに次の1～7を今回の調査の項目（以下、調査項目と呼ぶ）とした。

1. 発話の長さ
2. 助詞（主に「よ」「ね」、発話末の接続助詞）
3. 発話末の形式
4. 縮約形
5. 断定を避ける表現
6. 発話の種類（倒置、省略、疑問など）
7. 丁寧度

2. 結果

前述の調査項目に基づいて調査用紙を作成し、回答は荻野綱男氏作成のアンケート調査分析用ソフトウェアGLAPSをもちいて集計した。結果は必要に応じて、二組の平均値の差の検定あるいは独立した二組の比率の差の検定をおこなった¹。以下に調査用紙の各質問の概要と集計結果を述べる。

2.1 質問1

まず、各調査項目についてそれが性別を判断するさいに手がかりになるかどうか、つまり、女性的なことばだという意識があるかどうかを知るための質問をおこなった。

具体的には以下に示す20の文について、話し手がどの程度男性的、あるいは女性的だと感じるかを「非常に男性的」から「非常に女性的」までの七段階で判定してもらった。この調査に先立っておこなった予備調査²では、調査項目を含む文と含まない文を無作為に並べ、話し手が男性だと思うか、女性だと思うか、どちらともいえないかと判断を求めたが、調査項目が「ぼく」「あたし」のように絶対的男/女性語（井出他 1984）といわれるような性質のものばかりではないため、判断できないという指摘を受けた。また、男性か女性かという二者択一では調査項目の中でどれがもっとも男/女性らしさを感じさせる要素かという項目間の比較もおこなえなかった。そこで、本調査では男/女性的と感じる程度を七段階で尋ねることにした。さらに、判定しやすくなるのではないかと考え、調査項

目を含む文と含まない文を並べて示すことにした。しかし、二つの文を比べて、判断してほしいという指示はしなかった。はっきり指示してしまうと項目間の比較ができなくなると考えたためである。

また、最初に設定した七つの調査項目以外にも比較のために一人称、二人称という項目を加えた。以下に判定を求めた20の文と、それぞれの文のねらいとした調査項目を示す。

20の文	調査項目
①きのう、行ったんだよ、東京。	倒置（含む）
②きのう、東京、行ったんだよ。	倒置（含まない）
③早くいかなきゃ。	縮約形（含む）
④早く行こう。	縮約形（含まない）
⑤やっぱり映画行く？	終助詞「の」（含まない）
⑥やっぱり映画行くの？	終助詞「の」（含む）
⑦その方がいいかなとか思って。	あいまい表現「かなとか思って」（含む）
⑧その方がいいと思う。	あいまい表現「かなとか思って」（含まない）
⑨確かあったと思うんだけど。	文末の接続助詞（含む）
⑩確かあったと思う。	文末の接続助詞（含まない）
⑪きょうはいい天気だね。	終助詞「ね」
⑫きょうは休みだよね。	終助詞「よ」＋「ね」
⑬あしたは、仕事。	体言止め（含む）
⑭あしたは仕事です。	体言止め（含まない）
⑮おれは忙しいよ。	一人称「おれ」
⑯あたしは忙しいよ。	一人称「あたし」
⑰あんたはどうですか？	二人称「あんた」
⑱あなたはどうですか？	二人称「あなた」
⑲ご無沙汰しております。	
お元気でいらっしゃいますか。	丁寧度（高い）
⑳ご無沙汰してます。お元気ですか。	丁寧度（低い）

結果の集計は「非常に男性的」＝1、「かなり男性的」＝2、「やや男性的」＝3、「どちらともいえない」＝4、「やや女性的」＝5、「かなり女性的」＝6、「非常に女性的」＝7とし、それぞれの数字を回答数に掛け、それを合計したものを回答者の人数で割って平均値をだした。この値をここでは男女度と呼ぶことにする。この男女度の数値が小さいほど、その文が男性的だと判断された割合が高く、数値が大きいほど女性的だと判断されたことになる。次にその結果を示す。

20の文

男女度

	社会人		学生		性別		全体
	男	女	男	女	男性	女性	
①きのう、行ったんだよ、東京。	2.74	3.10	3.14	3.36	2.94	3.18	3.07
②きのう、東京、行ったんだよ。	2.74	3.18	3.27	3.62	3.01	3.35	3.18
③早くいかなきゃ。	3.97	4.71	4.65	5.31	4.32	4.94	4.62
④早く行こう。	2.94	3.78	3.59	3.88	3.03	3.82	3.41
⑤やっぱり映画行く？	4.12	4.13	3.78	4.19	3.94	4.15	4.04
⑥やっぱり映画行くの？	4.74	5.05	5.22	5.08	4.99	5.06	5.02
⑦その方がいいかなとか思って。	5.00	5.05	5.08	5.15	5.04	5.09	5.07
⑧その方がいいと思う。	3.21	3.61	3.38	3.62	3.30	3.61	3.45
⑨確かあったと思うんだけど。	4.33	4.85	3.92	4.54	4.11	4.73	4.41
⑩確かあったと思う。	3.12	3.49	3.27	3.73	3.20	3.58	3.38
⑪きょうはいい天気だね。	2.94	3.28	3.70	3.88	3.34	3.52	3.42
⑫きょうは休みだね。	3.74	4.00	4.24	4.69	4.00	4.27	4.13
⑬あしたは、仕事。	3.74	3.76	3.73	3.69	3.73	3.73	3.73
⑭あしたは仕事です。	4.24	4.29	4.35	4.62	4.30	4.42	4.36
⑮おれは忙しいよ。	1.29	1.37	1.41	1.46	1.35	1.40	1.38
⑯あたしは忙しいよ。	4.88	5.37	6.00	5.81	5.46	5.54	5.50
⑰あんたはどうですか？	2.32	2.98	3.08	3.08	2.72	3.01	2.86
⑱あなたは どうですか？	4.35	4.61	4.57	4.62	4.46	4.61	4.54
⑲ご無沙汰しております。 お元気でいらっしゃいますか。	4.53	5.61	4.43	5.04	4.48	5.39	4.92
⑳ご無沙汰してます。 お元気ですか。	3.56	3.61	3.78	3.81	3.68	3.69	3.68

この結果によると、調査項目のなかでもっとも差があらわれたのは「おれは忙しいよ」と「あたしは忙しいよ」であった。つまり、「おれ」は男性、「あたし」は女性のことばという意識が強くみられることがわかる。続いて大きいのは「あなたは どうですか」と「あんたはどうですか」の差である。

それぞれの調査項目を含む文と含まない文の男女度を比較してみると、1.0以上の差がみられたのは、前述の一人称、二人称という語彙に関する項目、「かなとか思って」という断定を避ける表現、「なきゃ」という縮約形、そして、文末の接続助詞であった。そのほか、回答者の男女差がみられた例として、丁寧表現の「ご無沙汰しております。お元気でいらっしゃいますか。」と「ご無沙汰します。お元気ですか。」がある。この二文については女性の回答者は前者の男女度を5.39、後者を3.69と評価し、その差は1.7となる。それに対し、男性の回答者の評価は、4.48対3.68であり、その差は0.8であった。後者の男女度は男女ともほぼ同じに評価しているにもかかわらず、前者の男女度に差があらわれたということは、女性のほうが男性よりも強く「女性は男性より丁寧な言葉遣いをする」という意識を持っているということがいえるかもしれない。

全体を通して、実例分析から推定したとおりの判定であった。より女性的な表現であると設定した文はすべてもう一方の文より高い男女度を示している。この結果はすべて、二組の平均値の差の検定で、0.1%から1%の水準で有意差がみられた。世代差では社会人・男性の男女度が全体として低い(平均3.625)ことが特徴的である。例文として示したものが社会人の男性にとってはあまり女性的ではないと感じられるものだったのだろう。それに対して、女性の学生の男女度は平均がもっとも高く4.109であった。

この質問では、実際の話しことばにあらわれる男女差が、男女差として意識されているかどうかを調べた。その結果、程度の差はあっても、それぞれの特徴が男女差を感じさせる要素の一部となっていることは確認できた。男女差を特に顕著に感じさせた要素は、「一人称」「二人称」「縮約形」「断定を避ける表現」「発話末の接続助詞」であった。「丁寧度」については予測したほどの大きな差はあられず、男女差を感じる表現に「男女差」がみられる例となった。

2.2 質問2

次に調査項目を含む談話が、聞き手にどのような印象を与えるのかを知るために、以下の四つの談話例について、話し手が男性の場合と女性の場合にわけて次の11の選択肢により印象を尋ねた(選択は5つまで)。結果は表1に示した。

- | | | | | |
|---------|----------|------|--------|--------|
| 1 好ましい | 2 好ましくない | 3 普通 | 4 品がある | 5 品がない |
| 6 十分に丁寧 | 7 丁寧さが不足 | 8 乱暴 | 9 女性的 | 10 男性的 |
| 11 その他 | | | | |

談話例 I

そしたら、あの一、なんか、食べ終わったあとで、もう×××の顔見たくないってゆうから、もう当分見なくてすむじゃない、とかいったら、だって仕事で会うじゃないってゆうから、そんな別におんなじ方向むいてんだから、顔がみえやしないわよ、っていったんだけど。

談話例 I に含まれる調査項目

- 長さ(一発話が途切れずに長く続く)
- 縮約形「ジャナイ」
- 断定を避ける表現「ナンカ」「トカ」
- 助詞「ワヨ」
- 文末の接続助詞「～ケド」

談話例 II

- A: や一、すいませんすいませんってゆう感じだった。
B: やあ、でもほんと、たいへんだった、けっこう。
A: らしいね。うーん。
B: うーん。
A: ほんとみんなぐったりして。口もきけない状態だった、とゆうふうに。
B: おもしろかったけどね。

談話例 II に含まれる調査項目

- 断定を避ける表現「テユウ感じ」「トユウフウニ」

文末の接続助詞「～ケド」

連用形終止「～シテ」

談話例Ⅲ

A：あ、あの、おそれいます。予約をお願いしたいんですが。

B：はい、いつでしょうか。

A：あ、あの、9月の14日と15日なんですが。

B：9月の14、15と、9月ですね。

A：はい。

談話例Ⅲに含まれる調査項目

丁寧度（話し手が女性の場合と男性の場合で評価が異なるかどうか）

発話末の接続助詞「～ガ」

談話例Ⅳ

A：お一、××××か。

B：おお、ひさしぶり。

A：お一。電話待ってたんだよ。

B：ごめんねえ、遅くなっちゃって。

A：いやいや。

談話例Ⅳに含まれる調査項目

談話の短さ

縮約形「チャッテ」

終助詞「ヨ」

【表1】 調査項目を含む談話例が聞き手に与える印象（全体138名）

話し手	好ましい いい	好ましくない	普通	品がある	品がない	充分丁寧	丁寧不足	乱暴	女性的	男性的	その他
I 男性	1	119	3	0	95	0	45	23	100	1	34
I 女性	2	99	19	0	111	0	52	30	37	8	34
II A 男性	3	52	71	1	41	0	45	6	17	20	14
II A 女性	3	66	46	1	63	1	46	17	9	41	9
II B 男性	5	37	88	3	30	1	34	6	9	21	7
II B 女性	2	49	65	1	48	0	46	16	5	37	3
III A 男性	30	32	72	16	9	46	4	0	30	6	22
III A 女性	31	30	72	20	12	39	11	0	19	6	16
III B 男性	60	7	72	25	5	49	20	5	7	9	7
III B 女性	51	13	74	26	5	43	28	6	13	8	5
IV A 男性	25	3	109	1	13	0	16	15	0	77	1
IV A 女性	1	92	10	1	85	0	29	73	0	97	5
IV B 男性	7	27	85	1	16	1	8	5	55	20	1
IV B 女性	3	44	51	0	47	0	30	34	9	55	5

全体をみると、話し手が男性の場合と女性の場合とで印象の割合が異なるものが多いことがわかる。まず、Iについては話し手が男性の場合は、女性の場合より「好ましくない」と「女性的」である

という割合が高くなる。女性が話し手の場合は「普通」と「品がない」が男性の時より多く、「男性的」もわずかながら増える。

IIはAとともに、話し手が男性の場合、「普通」の割合が高くなり、女性の場合は「品がない」「乱暴」「男性的」が、話し手が男性の場合より多くなる。

IIIは話し手が女性の場合と男性の場合とで異なる点は特になし。Aについては「普通」がもっとも多く、「好ましい」と「好ましくない」という正反対の印象がほぼ同じ割合になることが特徴だといえる。Bは「普通」が多く、「好ましい」の割合はAより高くなり、「丁寧さが不足」もやや増える。

IVのAは、話し手が男性の場合、「普通」がもっとも多く、「男性的」がそれに続く。また、「好ましい」の率が、女性が話し手の場合より高くなる。女性が話し手の場合は、「好ましくない」「品がない」「男性的」「乱暴」「丁寧さが不足」が男性の場合よりも高い割合を示す。Bは男性が話し手の場合は「普通」「女性的」が多く、女性が話し手の場合は「普通」と「女性的」が減り、「好ましくない」「丁寧さが不足」「乱暴」「男性的」が多くなる。

IとII、そしてIIIのAは女性に多くもちいられる特徴を含む談話例であり、IVのAは男性に多い特徴、IVのBは両者を含むものとなっている。それぞれについて話し手が女性の場合と男性の場合にわけて印象を尋ねたが、女性に多い特徴を含む談話例は、話し手が男性女性どちらの場合も聞き手にあまりよい印象を与えていない。それに対し、男性に多い特徴を含む文は、話し手が男性の場合はいい印象を与え、女性の場合はよくない印象を与えるという傾向がある。聞き手が男性でも女性でも、また、社会人でも学生でもこの傾向は変わらないが、「好ましくない」と感じる程度は社会人と学生とで違いがみられる。

この質問には、話しことばを目で読んで判断するという方法上の問題がある。また、あくまでも文全体の印象を尋ねたものであり、個々の調査項目が与えた印象を正確に計ることはできない。しかし、女性に多くもちいられることばの特徴を含む談話例がプラスの印象を与えるとは限らず、女性に多く使われる特徴が、よい印象に結びついているとはいえないようである。

また、女性に多い特徴を含む談話例は、話し手が男性の場合は「女性的」だという印象を与えるのに、話し手が女性の場合、「女性的」という評価を受けていないことも興味深い。「女性的」ということばが男性に対してもちいられる場合と女性に対してもちいられる場合のニュアンスの違いということであろうか。

2.3 質問3および質問4

質問3と4では話し方の男女の違いに関する質問をおこなった。この部分でのねらいは主に回答者が個人的にことばについて、また男女差についてどのような考え方を持っているかを知ることである。

2.3.1 話し方に男女の違いがあることについて

質問3-1は、日本語では話し方に男女の差があることについてどう思うかを尋ねるもので、回答の選択肢は「いいことだと思う」「違いがあってもかまわない」「男女の違いはないほうがいい」「特に違いがあるとは思わない」「その他」とした。

結果は表2に示したように、日本語に男女の違いがあることについて、「男女の違いはないほうがいい」、あるいは「特に違いがあるとは思わない」という回答はまったくなかった。日本語には男女の違いがあることは全員が認めた上で、「いいことだ」という肯定派と、「違いがあってもかまわない」という容認派に分かれている。

【表2】 話し方に男女の違いがあることについてどう思うか

回答者 選択肢	社会人			学生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
いいことだ (人) (%)	14 41.2	18 45.0	32 43.2	14 38.9	6 23.1	20 32.3	28 40.0	24 36.4	52 38.2
かまわない (人) (%)	19 55.9	20 50.0	39 52.7	21 58.3	19 73.1	40 64.5	40 57.1	39 59.1	79 58.1
ないほうが よい (人) (%)	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
違いはない (人) (%)	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
その他 (人) (%)	1 2.9	2 5.0	3 4.1	1 2.8	1 3.8	2 3.2	2 2.9	3 4.5	5 3.7
計 (人) (%)	34 100.0	40 100.0	74 100.0	36 100.0	26 100.0	62 100.0	70 100.0	66 100.0	136 100.0

グループ別にみると社会人は肯定派と容認派がほぼ半数ずつだが、学生は容認派が肯定派の倍となっている。特に学生・女性は、容認派が多い。全体をみると容認派が肯定派を上回っている。

2.3.2 話し方の男らしさ女らしさを意識する相手

質問3-2では自分が話すときに男らしさ、女らしさを意識する相手はどんな相手かを尋ねた。回答の選択肢は「同性」「異性」「目上の人」「目下の人」「同年輩の人」「初対面の人」「顔見知り程度の人」「親しい人」「誰に対しても意識しない」「その他」とし、該当するものすべてを挙げてもらった。結果は表3に示した。

【表3】 話し方の男らしさ女らしさを意識する相手

回答者 選択肢	社会人			学生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
同性 (人) (%)	15 18.1	10 7.4	25 11.4	15 15.6	4 6.5	19 12.0	30 16.8	14 7.1	44 11.7
異性 (人) (%)	10 12.0	23 16.9	33 15.1	10 10.4	8 12.9	18 11.4	20 11.2	31 15.7	51 13.5
目上 (人) (%)	2 2.4	29 21.3	31 14.2	3 3.1	18 29.0	21 13.3	5 2.8	47 23.7	52 13.8
目下 (人) (%)	12 14.5	5 3.7	17 7.8	13 13.5	2 3.2	15 9.5	25 14.0	7 3.5	32 8.5
同年輩 (人) (%)	14 16.9	8 5.9	22 10.0	19 19.8	3 4.8	22 13.9	33 18.4	11 5.6	44 11.7
初対面 (人) (%)	4 4.8	28 20.6	32 14.6	3 3.1	13 21.0	16 10.1	7 3.9	41 20.7	48 12.7
顔見知り (人) (%)	2 2.4	17 12.5	19 8.7	1 1.1	6 9.7	7 4.4	3 1.7	23 11.6	26 6.9
親しい (人) (%)	14 16.9	6 4.4	20 9.1	19 19.8	3 4.8	22 13.9	33 18.4	9 4.5	42 11.1
意識せず (人) (%)	7 8.4	7 5.1	14 6.4	11 11.5	4 6.5	15 9.5	18 10.1	11 5.6	29 7.7
その他 (人) (%)	3 3.6	3 2.2	6 2.7	2 2.1	1 1.6	3 1.9	5 2.8	4 2.0	9 2.4
計 (人) (%)	83 100	136 100	219 100	96 100	62 100	158 100	179 100	198 100	377 100

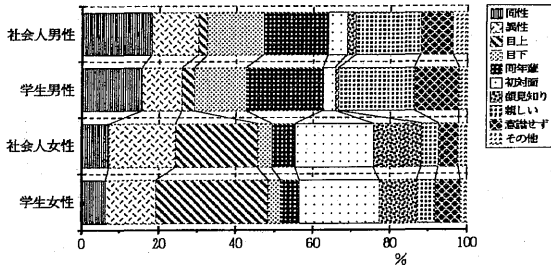


図 話し方の男/女らしさを意識する相手

述のようにグループの差ではなく性別の差なので、これは世代の差ではなく、男女の比率の差があらわれているものと思われる。

性別にみると、図からわかるように男性と女性とで対照的な結果になった。男性の話し手が男らしさを意識して話す相手は「同年輩」「親しい人」「同性」「目下」「異性」という順になり、女性の話し手が女らしさを意識して話す相手は「目上」「初対面」「異性」「顔見知り程度」となる。特に女性の場合、性別にみると「異性」を意識する率が高く、上下関係では「目上」が高く、親しさの程度では「初対面」「顔見知り程度」「親しい人」の順で、親しくなるほど意識しないという結果になる。それに対し、男性が意識するのは、性別にははっきりした差はあられず、上下関係では「同年輩」「目下」が多く、親しさでは「親しい人」と、女性とはほぼ逆の結果になっている。女性が女らしさを意識して話す相手は敬語を使う相手との類似がみられ、女らしく話すことと丁寧に話すことが同じような意識でとらえられていることがうかがわれる。

なお、「意識しない」という回答には性別、グループ別とも大きな差はない。

2. 3. 3 話し方の男らしさ女らしさを意識する理由

質問3-3では話し方の男らしさ、女らしさを意識する理由について尋ねた。選択肢は「相手に好感を持ってもらいたい」「自分の品位を保ちたい」「社会的な慣習として」「ただなんとなく」「相手に合わせて」「自分の男性らしさ/女性らしさを強調したい」「相手より上位にたつため」「相手より下手にでるため」「その他」で、該当するものを3つまで選択してもらった。結果は表4のようになった。

「男らしさ・女らしさ」を意識する理由は、全体では「社会的な慣習として」がもっとも多い。ついで、「自分の品位保持」「好感をもたれたい」となっている。

これをグループ別にみると、社会人の「社会的慣習」が多い他は大きな差はみられない。ところが性別では、男性は「ただなんとなく」「相手に合わせて」「上位に立つため」が女性より多く、女性は「好感をもたれたい」「自分の品位保持」「社会的慣習」の回答率が男性より高くなっている。つまり、女性は「好感をもたれたい」「品位保持」というプラスのイメージをもって女らしさを意識しているのに対し、男性は「ただなんとなく」「相手に合わせて」という消極的な理由で男らしさを意識していることになる。

まず、全体をみると男らしさ女らしさを意識する率は「目上の人」に対するときがもっとも高い。しかし、「目下の人」および「顔見知り程度の人」に対して意識する率がやや低いだけで、その他はそれほど大きな差はない。

グループ別では、社会人が意識する相手が「異性」「初対面」「目上」が比較的多いのにに対し、学生は「同年輩」「親しい人」「目上」となっている。しかし、特徴的なのは後

【表4】 話し方の男らしさ女らしさを意識する理由

回答者 選択肢	社会人			学生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
好感もたれたい (%)	7 10.6	19 21.3	26 16.8	9 15.3	12 22.2	21 18.6	16 12.8	31 21.7	47 17.5
自分の品位保持 (%)	9 13.6	23 25.8	32 20.6	7 11.9	10 18.5	17 15.0	16 12.8	33 23.1	49 18.3
社会的慣習 (%)	20 30.3	22 24.7	42 27.1	3 5.1	15 27.8	18 15.9	23 18.4	37 25.9	60 22.4
ただなんとなく (%)	9 13.6	5 5.6	14 9.0	15 25.4	7 13.0	22 19.5	24 19.2	12 8.4	36 13.4
相手に合わせて (%)	15 22.7	9 10.1	24 15.5	9 15.3	5 9.3	14 12.4	24 19.2	14 9.8	38 14.2
「らしさ」強調 (%)	2 3.0	5 5.6	7 4.5	9 15.3	3 5.6	12 10.6	11 8.8	8 5.6	19 7.1
上位に立つため (%)	1 1.5	0	1 0.6	5 8.5	0	5 4.4	6 4.8	0	6 2.2
下手にでるため (%)	0	3 3.4	3 1.9	1 1.7	1 1.9	2 1.8	1 0.8	4 2.8	5 1.9
その他 {人} (%)	3 4.6	3 3.4	6 3.9	1 1.7	1 1.9	2 1.8	4 3.2	4 2.8	8 3.0
計(人) (%)	66 100	89 100	155 100	59 100	54 100	113 100	125 100	143 100	268 100

さらにくわしくみると、社会人の男性と女性では、男性の「相手に合わせて」が女性より多く、女性は「好感をもたれたい」「自分の品位保持」が男性より多くなる。それに対し、学生の男女には大きな差はみられないが、女性の「社会的慣習」が男性より高いことが目につく。社会人の女性が積極的に女らしさを意識しているのに対し、学生には「慣習」だからという消極的な姿勢がみられる。

2. 4. 1 話し方の男女の違いの変化について

質問4では話し方の男女の違いの変化について尋ねた。4-1では男女の違いはなくなったと思うかどうかを質問した。選択肢は「男女の違いはなくなってしまった」「かなり男女の違いがなくなりつつある」「少し男女の違いがなくなりつつある」「特に差がなくなったとは思わない」「もともと日本語には男女の違いがない」「その他」で自分の考えにもっとも近いものひとつだけを選んでもらった。結果は表5に示した。

話し方の男女の違いがなくなったかどうかという質問に対しては、「違いはなくなってしまった」という回答はわずかだが、「特に差がなくなったとは思わない」という回答も少ない。大部分が「かなり男女の違いがなくなりつつある」か「少し男女の違いがなくなりつつある」かのどちらかで、この二つの回答についてはほぼ同数という結果になった。また、「もともと日本語には男女の違いがない」と答えた者はなかった。これは質問3-1でも尋ねたことを繰り返す形になったが、どちらも「男女の違いがない」という回答はゼロで、「日本語には男女の違いがある」ことが一般的に認められていることが確認された。

この質問においては、グループ別、性別による差はみられなかった。

【表5】話し方の男女の違いの変化について

回答者 選択肢	社会人			学生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
違いがなくなった(人) (%)	1 2.9	0 0.0	1 1.4	1 2.8	0 0.0	1 1.6	2 2.9	0 0.0	2 1.5
かなりなくなった(人) (%)	11 32.4	16 40.0	27 36.5	15 41.7	10 38.5	25 40.3	26 37.1	26 39.4	52 38.2
少しなくなった(人) (%)	18 52.9	17 42.5	35 47.3	10 27.8	13 50.0	23 37.1	28 40.0	30 45.5	58 42.6
ないうなら(人) (%)	3 8.8	6 15.0	9 12.2	7 19.4	3 11.5	10 16.1	10 14.3	9 13.6	19 14.0
もともとない(人) (%)	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
その他(人) (%)	1 2.9	1 2.5	2 2.7	3 8.3	0 0.0	3 4.8	4 5.7	1 1.5	5 3.7
計(人) (%)	34 100	40 100	74 100	36 100	26 100	62 100	70 100	66 100	136 100

2. 4. 2 話し方の男女の違いの変化をどう思うか

この質問以降は、質問4-1で程度の差はあっても「男女の違いがなくなった」ことを認めた回答者（「違いがなくなった」「かなりなくなった」「少しなくなった」のうちどれかと答えた者）のみ、回答することとしたため、回答者数は、社会人63名（男性30名、女性33名）、学生50名（男性27名、女性23名）の計113名となった。質問4-2は話し方の男女の違いがなくなってきたことをどう思うかというもので、選択肢は「いいことだと思う」「あまりよくない」「非常に嘆かわしい」「その他」からひとつを選ぶこととした。結果は表6のようになった。

【表6】話し方の男女の違いの変化をどう思うか

回答者 選択肢	社会人			学生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
いいこと(人) (%)	2 6.7	1 3.0	3 4.8	2 7.4	1 4.4	3 6.0	4 7.0	2 3.6	6 5.3
あまりよくない(人) (%)	11 36.7	23 69.7	34 54.0	11 40.7	7 30.4	18 36.0	22 38.6	30 53.6	52 46.0
嘆かわしい(人) (%)	6 20.0	3 9.1	9 14.3	6 22.2	0 0.0	6 12.0	12 21.1	3 5.4	15 13.3
その他(人) (%)	11 36.7	6 18.2	17 27.0	8 29.6	15 65.2	23 46.0	19 33.3	21 37.5	40 35.4
計(人) (%)	30 100	33 100	63 100	27 100	23 100	50 100	57 100	56 100	113 100

この質問に対して、もっとも多かったのは「あまりよくない」という回答であった。次に多いのは「その他」であるが、これは「どちらでもない」「なんとも思わない」というものがほとんどであった。また、「いいことだ」と「非常に嘆かわしい」を比べると、「嘆かわしい」という回答のほうが多い。

性別にみると、「非常に嘆かわしい」と答えたのは男性のほうに多い。また、グループ別では大きな差はないが、グループ別性別では、社会人・女性に「あまりよくない」が多く、学生の女性は「その他」が多い。

2. 4. 3 男女の違いがなくなったことについてどう思うか、その理由

続いて、自分が選んだ選択肢についてその理由を記述式で答えてもらった。回答の全体的な傾向として感じられるのは、

- ① ことばの男女の違いと男女の不平等を関連づけて考えている人が多いこと
- ② 男女の違いは日本語の特徴であり、美しさだという考え方があること
- ③ 男女の違いを感情面感覚面で肯定する人が多いこと

である。

「いいことだと思う」を選んだ理由として挙げられているのは、女性の社会的立場の向上のあらわれであるというものが多い。この理由の背後には社会的な男女の不平等が男性と女性のことばの違いを生んだという考え方があるようだ。

「あまりよくない」「非常に嘆かわしい」を選んだ理由は次のように分類できる。

- a 男性が女性的な話し方をするのは気持ち悪い、女性が男性的な話し方をするのは乱暴でいやだという感覚的な問題
- b 男女のことばの違いは日本語の特徴であり美しさである
- c 男女のことばの違いは文化である
- d 男女それぞれの特徴があり、それを反映するのがことばだから大切にしたい
- e それぞれの性に合った話し方ができるかどうか品位、知性があらわれる
- f 男女のことばの変化そのものではなく、変化の方向が好ましくない
- g 男女同権とことばの性差の問題は別なもの

「その他」を選んだ理由には次のようなものがある。

- a 変化は時代の流れだからしかたがない
- b 時と場合に応じて使い分けができればよい
- c 違いがなくなったといっても世代や人により異なるので全体的には問題ではない
- d ことばも個性の一つだから好きな話し方をすればよい
- e ことばに関する他の問題と比較して男女差は大した問題ではない
- f 理性的にはよいと思うが感情的には反発を感じる
- g その他

以上のように質問3および4では日本語の性差に関する意識について抽象的に尋ねた。ここで明らかにになったのは次のような点である。

- a 日本語には男女の違いがあるという意識は共通のものである
- b 話し方に男女の違いがあることについては肯定的な見方が多い
- c 男らしさ女らしさを意識する相手
男性 = 「同年輩」「親しい人」「同性」「目下」「異性」
女性 = 「目上」「初対面」「異性」「顔見知り程度」
- d 男らしさ女らしさを意識する理由
男性 = 「相手に合わせて」「ただなんとなく」
女性 = 「好感をもたれたい」「自分の品位保持」「社会的慣習」

- e 程度の差はあっても「男女の違いはなくなりつつある」という認識がある
- f 男女の違いがなくなったことについてはあまりよくないという意識がある

この結果をみると、日本語における男女の違いがかなり肯定的にとらえられていることがわかる。特に「女性のことば」に対するイメージは、意識する相手や理由などから「敬語」に近いものであるといえるのではないだろうか。逆に「男性のことば」はあまりよくないものようである。しかし、このイメージには世代差がある。特に女性の場合、社会人の女性、なかでも年輩者は女性らしい話し方を積極的に肯定し、使っているのに対し、学生の女性は消極的な肯定で、社会的な慣習だからしかたがないという意識がみられる。

また、男女の違いがなくなったことをどう考えるかという質問については、社会人の女性が、「よくない」という意識を比較的強く持っているのに対し、学生の女性は、積極的な肯定はしないものの、「悪いことではない」あるいは「時代の流れ」、「個性の問題」としてとらえ、否定的な姿勢ではないという点にも世代差があらわれている。

3. まとめと今後の課題

以上述べてきたようにこの意識調査では実例のなかで女性のことばに多くあらわれた点について、

- ①女性に多いという認識があるかどうか
- ②聞き手にどのような印象を与えるか

という二点と、日本語の話し手が男女差をどうとらえているかについて質問した。その結果をみると、日本語の母語話者の「男女差」に関する意識がある程度うかがわれるように思う。

まず、第一の点に関しては、実例のなかで女性の発話に多かった要素を含む文のすべてが、その特徴を含まない文より女性的であると判定された(0.1%~1%水準有意差)。

二点目の聞き手に与える印象は、女性に多くあらわれた要素を含む文は話し手が男性でも女性でも「好ましくない」印象を与えるという結果になった。それに対し、男性的な語(「おー」「だよ」)を含む文は、話し手が男性の場合は「普通」あるいは「好ましい」という印象をもたれるが、話し手が女性の場合の「好ましくない」の率は、逆の場合(男性の発話の女性的要素)より高くなる。

そして、「日本語の男女の違いをどう思うか」という抽象的な質問になると、男女の違いが高く評価されていることがわかる。特に「女らしい」ことばは「目上」や「初対面」の人に「好感を与える」ためもちいられるという結果になる。

こうした抽象的な質問に対する回答をみても、日本語母語話者の意識の中には理想的な「女らしい」ことばがあり、また、別の意味で理想的な「男らしい」ことばがあるように思われる。こうした理想的な女らしいことば、男らしいことばはプラスの評価を受けているようである。ところがそれに対して、質問1・2にみられるように、日常的な親しい同性同士の会話に実際にみられる女性のことばに多い要素は、女性のことばの特徴として認識されてはいてもあまりよい評価を受けていない。

このことから、こうした意識調査で、抽象的な「男性の話し方」「女性の話し方」「男らしいことば」「女らしいことば」というものは、実際に話されている女性のことば、男性のことばとは必ずしも一致せず、理想化されたものであると考えられるように思う。日本語における男女差を研究する場合には、この二つのレベルを分けて考える必要があるのではないだろうか。前者からは理想とされる

女性像・男性像がうかがえるように思われるが、後者には現実の姿が反映されているのかもしれない。

本研究には、実例の収集法のかたよりや、調査用紙の一部の適切さを欠く質問および例文、インフォーマントのかたより、また、話しことばを紙に書いて表現したものについて判断するという方法などの問題点があり、この結果だけで結論づけることはできないが、今後、これらの問題点を改善した調査によりさらに研究を進めていきたいと考えている。

【注】

- 1 本文中、アンケートの集計結果について、二つの数値を比較してどちらが多い(少ない)と述べる場合は、原則として、この検定の結果、0.1%~5%水準の有意差がみられることを確認した。
- 2 1992年7月に学生5名、社会人3名に対しておこなった。アンケートと面接による調査。

【主な参考文献】

- 飽戸弘 1987 『社会調査ハンドブック』日本経済新聞社
- 井出祥子 1979a 『女のことば 男のことば』日経通信社
- 井出祥子 1979b 『大学生の話しことばにみられる男女差異』第6回ICU言語社会学シンポジウム
- 井出祥子 1982 「言語と性差」月刊言語Vol.11, No.10, pp.40-48
- 井出祥子/堀素子/川崎晶子/生田少子/芳賀日登美 1985 『女性の敬語の言語形式と機能』
文部省科学研究費研究成果報告書
- 井出祥子/川成美香 1984 「日本の女性語・世界の女性語」言語生活 No.387, pp.32-39
- 川口容子 1987 「まじり合う男女のことば—実態調査による現状」言語生活 No.429, pp.34-39
- 小泉保 1976 「女性の言葉」月刊言語 Vol.5, No.5, pp.60-69
- 近藤純夫 1984 「女の子と「女ことば」—「女ことば」は、滅びゆくのか」
言語生活 No.387, pp.48-53
- F・C・バン編 1981 『日本語の男女差』東西手話学会
- 堀井令以知 1991 『女の言葉』明治書院
- 本田明子 1992 「日本語における女性語の特徴—電話による会話の分析から—」荻野綱男編
『言語行動論報告2』
- Brown, P. 1980 "How and why are women more polite : some evidence from a Mayan community." in McConnell-Ginet, S. et al. (eds.) *Women and Language in Literature and Society*, New York : Praeger.
(『文学と社会における女性と言語』別府恵子編訳 1989 弓書房)
- Coates, J. 1986 *Women, Men and Language : A Sociolinguistic Account of Sex Differences in Language*, London : Longman Group UK Ltd. (『女と男とことば—女性語の社会言語学的研究法—』吉田正治訳 1990 研究社出版)
- Trudgill, P. 1972 "Sex, Covert Prestige, and Linguistic Change in the Urban British English of Norwich." *Language in Society* No.1
- Trudgill, P. 1974 *Sociolinguistics: An Introduction*, Harmondsworth : Penguin Books Ltd.
(『言語と社会』土田滋訳 1975 岩波新書)

謝辞

本稿は1992年度提出筑波大学大学院修士論文の第三章を修正・補筆したものであり、修士論文をまとめるにあたり、終始きめ細かくご指導くださいました荻野綱男先生に、心より感謝いたします。また、本稿をまとめるにあたり、高田誠先生にはたいへん有益なご教授、ご指摘をいただきました。深く感謝いたします。そして、アンケート調査の場を与えてくださり、貴重なご助言をくださいました芳賀純先生に、心から感謝の意を申し述べます。